

北理研だより

＜220号 令和2年(2020年)7月10日(金)発行＞

令和2年度 札幌支部大会 主題説明会

6月16日(火) 主題説明会 開催

令和2年度札幌支部大会の主題説明会が6月16日に札幌市立駒岡小学校で開催されました。今年度は新型コロナウイルス感染リスクを軽減する観点から、北理研会員が来校する人数を極力絞っての実施となりました。実践研究校の研究概要、北理研の研究部提案と札幌支部大会の公開単元の発表を行い、その後の質疑では研究の重点について、活発に意見交換が行われました。

【役員挨拶】

紺野 高裕 事務局長(北九条小学校長)

今年度の北理研札幌支部大会を11月13日に三木会長のおられる駒岡小学校で開催できますことに対して、厚くお礼申し上げます。本日をスタートとして、北理研会員が駒岡小学校の先生方のお力を借りながら、授業作りをして参ります。駒岡小学校の周りがある恵まれた地域素材、豊かな自然環境、特に動植物や川を取り上げて授業作りができることは、私たちにとっても大変貴重な機会であります。駒岡小学校の子どもたちが楽しく問題解決に取り組み、理科で育てる資質・能力を高められるよう、先生方と共に取り組んで参りたいと存じます。

今回、新型コロナウイルス感染リスクを軽減する観点から、来校する人数を極力絞っての実施となります。多くの制約の中での取組となりますが、駒岡小学校の子どもたちのために私たちも精一杯、力を尽くしたいと存じます。

【駒岡小の研究】

石黒 智志 研究部長(駒岡小学校)

研究主題「つなげる力の育成」～「駒岡から未来へ」と特色あるカリキュラムの編成～

駒岡小は、4か年研究の最終年である。1次研究では「白熱した伝え合いを通して学びを深める子」を研究主題とした。駒岡小の子どもたちは、自分の考えをもつこと、自分の考えを表出することに苦手意識があるため、一人一人が主体的に学びに向かい、対話を通して仲間と共に学びを深めていく子どもの育成をねらった。1次研究から見えた成果としては、子どもたちは、伝え合うことに対する「楽しさ」や伝え合うことの「よさ」に目を向ける姿が見られた。

課題としては、学びの対象と自己をつなげる力や他者と自己をつなげる力が育っていなかった。2次研究のスタートにあたり、駒岡小の子どもたちのよさと課題を明らかにするために、校内の先生方とディスカッションを行ったり、子どもにアンケートを取ったりした。その結果、先生方の見取りと子どもの実態にズレがあることから、子どもの「好き」という思いと「学びの成果」とを整合させていく必要性を感じた。駒岡小の子どもに必要な力は、素直さと共感性である。駒岡小の子どもの実態と、先の時代に求められる学力との関連から、「つなげる力」の育成～「駒岡小から未来へ」特色あるカリキュラムの編成～を研究主題に設定した。研究推進として、以下の3点に重点を置く。



○重点① 深くおもしろい授業～比較・関係付けにより考えを深める～

授業の入り口のおもしろさではなく、考えが深まるおもしろさを考えた授業展開を行なっていく。そのために視点を二つ設定した。視点1は、選択(自己決定)することで問題意識を生む。視点2は、「比較」「関係付け」により考えを深める。このことにより、子どもの変容や納得が見える深くおもしろい授業となる。

○重点② 北理研から学ぶ理科～自然との行き来から「知」が生まれる授業～

駒岡小のよさを生かしたカリキュラムの再編成を行う。駒岡小は、「縦割り活動」と「自然と教室の行き来」を生活・総合・理科で行うカリキュラムであった。実践研究校として、北理研から理科を学び、自然との行き来から「知」が生まれる授業を行い、カリキュラムの再編成を行なっていきたい。

○重点③ 特色ある年間指導計画の作成～「自然と教室の行き来」を位置付けた年間指導計画の作成～

これまでの研究をもとに、北理研との学びを反映させて、「自然と教室の行き来」を位置付けた年間指導計画を作成する。

【主 題 説 明】

高 畠 護 研究部長（附属札幌小学校）

駒岡小における研究推進の重点 「つなげる力を育成する『深くおもしろい』授業」

今年度の北理研研究主題「自然との関わりを求め、知がつながる問題解決」、駒岡小の研究主題「『つなげる力』の育成」から、実践研究校の研究の重点を「つなげる力を育成する『深くおもしろい授業』」とした。

研究の視点は、「経験が活きる学び」＝選択（自己決定）することで問題意識を生む、「変容の自覚を促す学び」＝「比較」「関係付け」により考えを深める、の2点とした。



○ 視点1 選択（自己決定）することで問題意識を生む

授業づくりに当たり、事前に子どもの実態を把握する。過去の学習や生活経験、学習する単元に関連する知識・技能がどれくらい身に付いているのかを事前に捉える。単元の中に、駒岡小の研究の重点である選択（自己決定）することで問題意識を生む場面を設定する。子どもが自己の意思で選択できるように単元の展開を複線化し、それぞれの問題意識に対応することができる単元構成や授業の展開を考えていく。

○ 視点2 「比較」「関係付け」により考えを深める

学びの変容の自覚を促すために、経験を引き出し、活動中の気づきを書き、授業の終末に「理科日記」として記録を残す。過去の自分との比較を通して自らの成長を自覚できるようにする。教師は、子どもが働かせた見方・考え方を自覚させる働きを行う。学習経験の想起、見方・考え方の価値付け、そこに駒岡小の研究との関連から「比較」「関係付け」により考えを深めることを大切にする。学習や生活経験、他者の考えを比較し、関係付けを行うことにより、子どもの深い学びに繋がっていく。

○ 授業部会 研究単元 駒岡小の自然豊かな環境を生かして

- ・ 3 学年「こん虫を育てよう」～「自然」と「飼育」をつなげる
- ・ 4 学年「季節と生物」～季節を巧みに生き抜く生物
- ・ 5 学年「流れる水のはたらき」～「自分」と「環境」とのつながり
- ・ 6 学年「生き物のくらしと環境」～「空気」と「生物」のつながり

◇質 疑◇



○視点2で、「書く活動の重視」が示された。本校研究部でも、キャリアパスポートを充実させることを考えていた。そのために、日々の授業でのふり返しなどをためていくことで、自らの変容を自覚させることにつながると考えが深まった。

○私も、今年度の授業で書く活動を大切にしていこうとしている。まずは、理科で伸ばした書く力を他教科にも生かしていきたい。

○視点1の「問題を見いだす」ことが大切だと感じた。自分の実践では、解決したら停滞し動きが止まるという課題がある。提案で示された具体例にあるように、自分たちが追究し続けるような学びを目指したい。

○ 問題意識が醸成されていかないという課題に対しては、生活との結び付きが大切であると、認識が深まった。これは、理科だけでなく、他教科の学びにも言えることで、生活から、追究が始まるからこそ、問題意識が醸成されていき、それを生活に返していくことが重要であると感じた。

○ 価値付けは、子どもの言動を「よし」「悪し」とくくるものではないことに注意が必要だ。子どもの発言や関わり の根拠や背景を分類し、それぞれにどのような価値があるかを伝えて返してあげることが重要である。

	北海道小学校理科研究会 事務局長 紺野 高裕（札幌市立北九条小学校長） Tel. 736-2564 Fax. 736-2565 E-mail : takahiro.konno@city.sapporo.jp
	担当：田代 智昭（広報副部長） 札幌市立共栄小学校 Tel. 891-4602 Fax. 891-0493